

三津枝さん、喜んで下さい、兼ねての、兼ねての
志望が叶つて、私もとうとう近いうちに上京するこ
になりました。

あゝ上京!

この言葉を聞いただけでも、私の身うちはふるひ
ます、而も公然の上京!

何年越しなき悶え、思ひなやんだことでせう、三
津枝さん、嬉しいです、古い言葉ですけれども、夢
の様に思はれて、なんだか嬉しさの餘りに氣がポ
ツツとしてきたように思はれます。

それにしてもよくまあ、父母が許して呉れました
わねえ、不思議です。とても、とても許しては呉れ
まい、と斯う思ふと悲しくつて悲しくつて、いつそ
思ひ切つて無理に家出してはうとまで思つても見
ましたが、かと思つて、私にはそれだけのことを敢

てする勇氣もなく、徒らに思ひ亂れ、なせ私は
こんな意地地がないのか、三津枝さんのように目
的に突進することが出来ないのかと、無理から家出
してまで、素志をお通しなすつたあなたの心持を羨
みながら、毎日思ひ亂れ、思ひ亂れて、たゞモウク
シクシと徒らな日を送り迎へて居りましたの。

だけれども、とうとう決心のほどを固めて、何が
なんでも上京して志望を叶へないでは置かないと、
實は此夏頃から少しづつ其準備にかゝつて、内々着
物なんぞをこつそり友達の家に出し、持ち出し、
一方、私が居なくなれば、姉は店の方がいそがしい
でせうし、母も最うとる年で縫物のやうなものにも
困るでせうと思つて、せめては家中の着物を皆な仕
立てあげ、片付けて置いて出て行き度いものと、せ
つせと掛つて縫つて居りました。

氣とられぬやう、氣とられぬやうとは心がけたの

ですけれども、いつもは、最う寒くなつて来た、雪が降る頃になつて間違付かないやうに、ちつと手傳つてと云はれても、どうかすると讀書にばかり耽り勝ちな私が、もう何も縋つて置くものはありませんか、母さんの浴衣は？といった風なものですから變だと母にも氣がついて、そつと土藏の箆笥などを調べたのだ相です、ところがないでせう、一枚づゝ一枚づゝ、それこそ鼠が米をひくやうに持ち出したのですけれど、私の引出しは殆んど空っぽになつて居たのです、母はもう驚いてしまつて、或日私が何の氣もなく裏庭で洗濯して居りまゝと、そつと傍へ寄つて来て、一寸内々で話し度いことがあるから土藏へ来て呉れと云ふやありませんか、

私はハツとして、直ぐさとられたなと、直覺しちまひましたが、斯うなつては仕方がない、どうなるものか、何が何でも歎願して上京の許可を得るより外はない、と決心して、私は自分でも驚く程大膽に、胸一つ轟かせないで、母の後について土藏へ入つて行きました。

「今につて、いつまで待つたつて册證行けさうなものやありませんか、私はそんなあてにもならん事をあてにして、あげくの果に失望するやうなそんな馬鹿な真似はしてられません、行きます、どうしても行きます。」と、つい云ひ切つてしまひました。

「どうしても行くつて！」

母は歎息して、いつまでも黙つて居ります、

「母さん、許して下さい、解らないことを云つて済みませんでした」と、私は幾度、口先まで出かゝつ



しようなどと、無分別をしないやうに、月々の學費も少しづつでも都合して送るやうにしませうから安心しておいでよ。」

母は嚴かな、けれども青ざめた唇をふるはせながら、いきなり訊きました。私はすまないと思はぬではありませんでしたけれど、

「東京へ、だつてどうしてもやつて下さらないんですもの、仕方がないやありませんか、私だつて無斷で行きたくはありませんけれど、ねえ母さん、承知して下さい。」

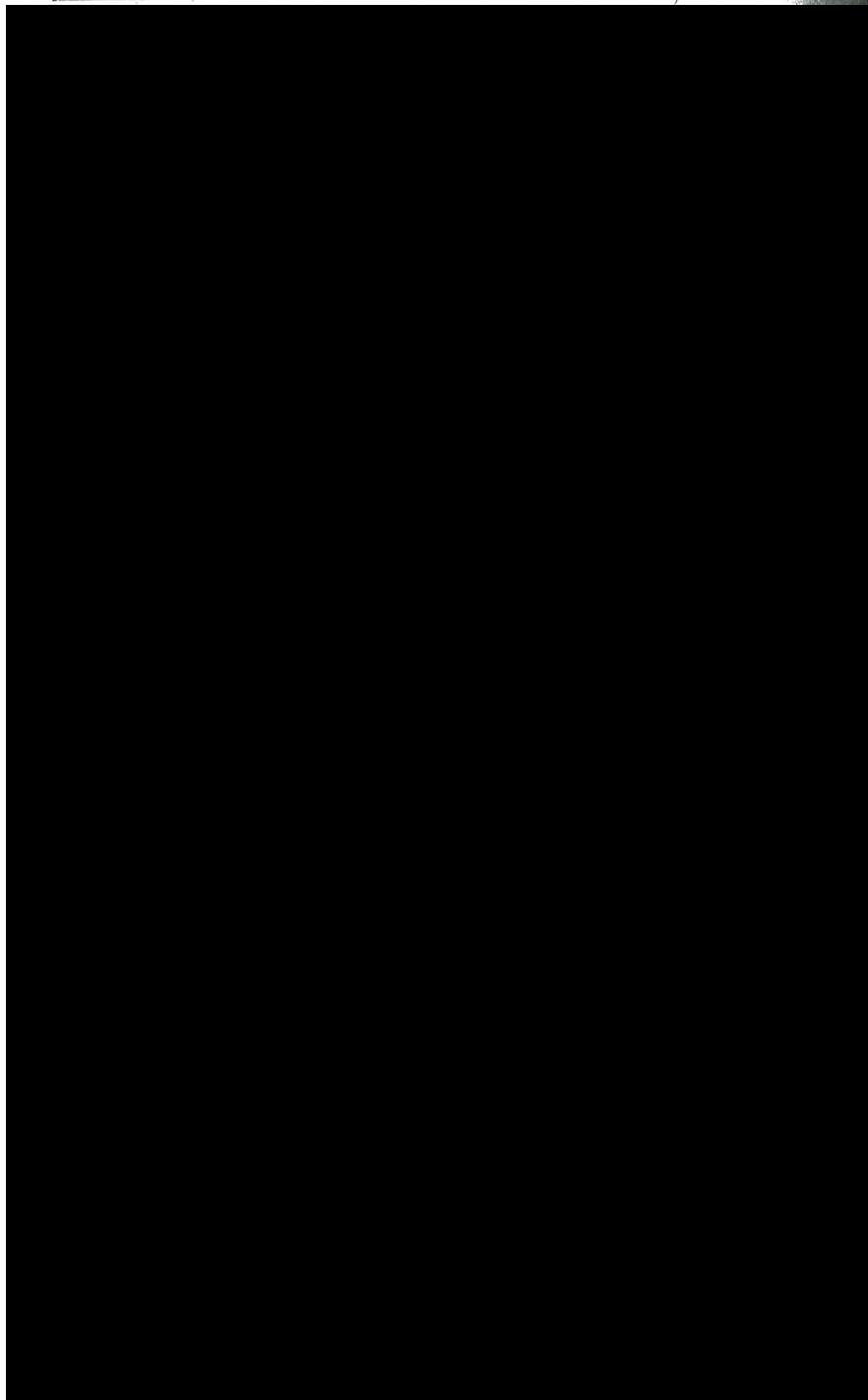
「それはもうお前の心持ちも解つて居る、母さんだつて承知して出してあげたいのはせいゝだけれど、仕方がない、今の家の状態では、娘を二人遊學させると云ふやうな餘裕がないから、どうぞ、今暫く我慢してお呉れ、其代り、必要な書物は何でも私が責任を持つて買つて貰つてあげるから、ねえ、どうぞ無暴なことはいしないで呉れ、今に又、都合して東京へ出すやうにするから——」

私は母の顔をあふぎ見るとも得致しません、其眼には涙が一杯みなぎつて、兩の頬を傳ひ流れて居ましたでせう、胸が迫るといつたやうな調子で、私は只もう、うつゝいたまゝ、何と云ふ不孝者！とわれど言ひながら、母の背を叩きながら、

「行く」と云つたつて、無暗に東京へ出て行つたばかりでも仕方なからうに、學費のこと考へないぢや。

暫くして母は斯様口をきりましたが、また黙つて考へて。

「だがまあ、それ程にお云ひのを無理にとめるのも心ない、父さんには又私が好いやうにお願ひして許して頂くことにませうから、まあ、無斷で家出しようなどと、無分別をしないやうに、月々の學費も少しづつでも都合して送るやうにしませうから安心しておいでよ。」



私は夢かと喜んでそれと一緒に、また、取りかへしのつかない、大變な不幸をしたと思ふと、濟まなくて濟まなくて、今更泣いてお詫をして、もうく行かんでもよござんすと云ひ度いような氣もするのでした。

「母さん！濟みません。」

「いゝえね、安心しておいで、私がすつかり好いよ

うにしてあげますから。」

母と一緒に土藏から出て、私はまた裏庭の洗濯場へ歸つて來ましたが、バサバサと汚れものをすもぎ出しながらも、母のこゝろもちだの、自分のこゝろもちだの、あれこれ考へると悲しくなつて、なせ自分分は東京へ出て修學しないでは居られぬやうな、そんな少女なのだらうかと、腹立たしい、やるせない氣も致します。

其頃はまだ私はほんの小供のことで、委しい事情も解りませんが、亡くなつた兄と云ふのが、大の學問好きで、父母は苦しい中から兄を東京に遊學させて居りました。月の末になりますと、晩の御飯を濟

した證書をしつかり内懷に入れて、同じ町うちの去る家へ金を借りに行き行きました。

私の上京後、或は父はさうするのではありますまいか。

考へると堪らなく心苦しうございます。

上京の應じさと此必苦しさ！三津枝さん、察して下さい、私は父母に出來るだけ學資の心配をかけたくないと思つて、いろ／＼考へました末、さるつてを求めて、某實業家の家に寄食することになりました。

喜んで下さい、近いうち上京いたします、何れ着京の日取りは定り次第御しらせいたしますから、どうぞ不案内の私を新橋に迎へて頂戴な。

三津枝さん、二人が逢つて握手して、ニツコリ笑み交すのも、モウ直ぐですわねえ、どうぞ喜んで下さい、私の今度の上京を！（をばり）